

論文審査の要旨および担当者

報告番号	甲 第 号	氏 名	明石 枝里子君				
論文審査担当者：	主査	慶應義塾大学教授 工学博士 砂原 秀樹					
	副査	慶應義塾大学教授 経営学修士(MBA) 岸 博幸					
		慶應義塾大学教授 工学博士 村井 純					
		有限会社ヒューマンリンク 博士(学術) 中野 恭子					
(論文審査の要旨)							
<p>明石枝里子君の博士学位請求論文は「Collaboration among Universities for Region-wide Educational Ecosystem-The Practice of the Evidence-based Approach Project in Southeast Asia and Japan-」と題し7章から構成される。</p> <p>論文では、日本・東南アジア9ヵ国7大学が教育協力をし、域内の新出社会課題に取り組む人材育成プロジェクト「エビデンス・ベースド・アプローチ(EBA) コンソーシアム」をフィールドとし、筆者が、プログラムデザイナーおよびプロデューサーとして、課題を根拠を持って明らかとし、多国籍・学際的な学生と協働し取り組むことができる学生を育成するための、エデュケーション・エコシステムの設計を行い、4年間の実践をもとに知見をまとめたアクションリサーチ型の研究である。</p> <p>筆者は、EBAコンソーシアムのためのエデュケーション・エコシステムを以下の3つのアクションによって実現することを提案し、実践し、その評価を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・EBAコンソーシアムメンバーである様々な背景を持つ7大学が互いに協働し、プロジェクトを運営していくための体制を築く。</li> <li>・その体制の下で、各大学から参加する多国籍・学際的な学生が、互いに学び合うことができるpeer-learning手法を取り入れた、ラーニング・デザインをオンサイトおよびオンラインで構築する。</li> <li>・各大学が主導し、各々が持つ知識や専門性を活かしたField-orientedな教育プログラムをデザインし実施する。</li> </ul> <p>このアクションリサーチ型の研究を通して実現したEBAエデュケーション・エコシステムにおいて、育成された人材はどのように社会課題に取り組んでいるかを、実際の社会課題(COVID-19)時の取り組みなどからも検証を行い、日・東南アジアにおける、社会課題に取り組む人材育成のための、大学間教育協力ありかたを述べている。</p> <p>この論文は7つの章で構成されている。</p> <p>第1章では、現代における社会課題の特徴、特に日本・東南アジアの社会課題を概説し、その解決のために、域内の大学が教育協力をし共に人材を育成する手法とその課題について議論している。</p> <p>第2章では、EBAコンソーシアムにおいてエデュケーション・エコシステムを構築するために必要な要素を探るために先行文献・関連プロジェクト調査を行い、上記した本フィールドに必要な3つの要件を見出す過程を述べている。</p> <p>第3章では、評価の枠組みなどを含んだアクションリサーチ計画の詳細が示されている。</p> <p>第4章では、成功事例として、筆者が関わった日本とアジアの高等教育機関で構成されるインターネットを活用した教育協力プロジェクト School on Internet ASIAプロジェクトとその基盤であるAsian Internet Interconnection Initiativesにおける知見をまとめ、第2章で洗い出された要素に対する分析とともにエデュケーション・エコシステム設計への示唆をまとめている。そして、第5章では、2014年から2017年にかけて、エデュケーション・エコシステムをデザインするためのアクションプロセスの詳細を記述し、各アクションを総合的に評価をしている。</p> <p>第6章では、構築されたエデュケーション・エコシステムで育成された人材が、地域コミュニティやメンバー大学にどのようなインパクトを与えたかを調査並びに分析し、その有用性を検証している。さらに、この作成過程で得られた重要な要素をまとめている。最後に、第7章では、今後の大学間連携のあり方について提言している。</p> <p>本論文は、社会課題を軸にしてフィールドに根ざした人材育成プログラムを、大学間協働を通して提案開発し、日・アジア地域の大学から約400人以上の学生が参加する実践的なカリキュラムとして構築できたことに加え、長年の実績を通して大学間において教育協力を遂行するための関係並びに体制を構築し、日・東南アジアの大学間教育協力のあり方に新しい視座を与えたことは、高く評価できる。</p> <p>以上、審査の結果、本論文は博士(メディアデザイン学)の学位論文として十分な価値を有するものと認める。</p>							
審査経過							
<p>2019年2月8日、10:00-11:30 予備口頭試問審査会が協生館 C3S01 教室にて開催され、審査の結果合格した。予備口頭試問審査委員：大川恵子君、岸博幸君、砂原秀樹君</p> <p>2020年12月23日、13:30-15:00 博士論文公聴会がオンラインにて開催された。同公聴会終了後、同教室で博士論文審査会が開催され、合格条件を提示、その後の修正対応にて、合格を決した。なお、公聴会出席者は以下の通りであった：</p> <table border="0"> <tr> <td>博士論文審査委員</td> <td>4名</td> </tr> <tr> <td>来場者</td> <td>14名</td> </tr> </table>				博士論文審査委員	4名	来場者	14名
博士論文審査委員	4名						
来場者	14名						